

# 季刊 連句 第20号



## 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

再版  
B6判  
三五二頁  
三五〇〇円  
連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

### 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

## 水原秋桜子編 二三〇〇円 俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

## 水原秋桜子編 二八〇〇円 現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

## 大後美保編 二八〇〇円 季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をストック・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

## 中村俊定監修 四五〇〇円 難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一六〇〇円

国語慣用句大辞典 A5 六二〇円

国語慣用句辞典 B5 三三〇円

国語史辞典 B5 一〇〇〇円

日本語源辞典 B5 一八〇〇円

京都語辞典 B5 一〇〇〇円

擬音語擬態語辞典 B5 三三〇円

隠語辞典 B5 三三〇円

近世上方語辞典 A5 一四〇〇円

花柳風俗語辞典 B5 三三〇円

大正新語俗語辞典 B5 一〇〇〇円

難訓辞典 B5 三三〇円

名乗辞典 B5 三三〇円

名数数詞辞典 B5 三三〇円

あいさつ語辞典 B5 三三〇円

新版 ことば遊び辞典 B5 一〇〇〇円

類語辞典 B5 一〇〇〇円

類義語辞典 B5 三三〇円

表現類語辞典 B5 一〇〇〇円

新版 文章表現辞典 B5 一〇〇〇円

阿蘇にて (南柏雜記 18) .....	1
恋句特集	
現代恋句小論 .....	東 明雅..... 2
恋句あれこれ .....	(故) 根津 芦丈..... 4
付句における恋の倒錯 .....	杉内 徒司..... 6
恋句雑感 .....	小出きよみ・坂本孝子・市野沢弘子..... 8
「市中は」の巻鑑賞 (VI) .....	東 明雅..... 10
歌仙 女正月 .....	捌 東 明雅 ・ 文 式田 和子..... 14
「蓑虫」付勝練習二十韻 .....	16
第二十四回 猫蓑会 二十韻 六卷 捌 小川弥生・井手櫛晴・坂本孝子.....	18
	副島久美子・八角澄子・若尾よしえ
沙羅の会 脇起り百韻 二卷 葱白く.....	捌 氏原 正雄・馬場 彬風..... 20
波郷先生の連句に思う .....	下鉢 清子..... 24
四宮連句会 歌仙 勤労感謝の日 .....	捌 東 明雅..... 26
両吟二十韻 山に山 .....	原 裕・中島 啓世..... 文 啓世..... 27
アメリカ便り .....	竹本 義人..... 28
新刊紹介	
小出きよみ著「あさって」 .....	9
阿部 正美著「芭蕉連句抄 第十篇」 .....	9
清水 瓢左著「蕉風連句の髓」 .....	9
雲英 末雄著「芭蕉連句古註集 猿蓑篇」 .....	28
雁帛往来・連句会案内 .....	29

表紙 (昇り龍) 宮崎 龍火子

阿蘇にて

南柏雜記 18

雅

阿蘇内の牧温泉、「蘇山郷」は古いけれども貫禄のある宿だった。昔は宿屋を業とせず、和歌好きの素封家の邸で、与謝野鉄幹・晶子夫妻を招いて歌会をしたらしく、内の牧城の大杉一本で建てた室など、実に見事なものであった。六間半の縁側の長押に直径四、五十糎はあろうと思われ一本の巨木が使われていたので、ああ、これが大杉というものなのかと思って、あとで聞いたらこれはその大杉の枝で、肝腎の大杉は製材して、柱となり、床となり、天井となっておよそ五十糎の室全部の用材を賄ったのだと聞いて、ちょっとびっくりした。「大きなひと木の杉を阿蘇に斫り、君が造れる万年の家」と鉄幹はその家を誇りだが、その家もよる年浪には勝てず、今年早々取りこわして新しいホテルを建てるそうだ。なるほど鉄幹、晶子の時代のものだから古いことは古い。しかし、この見事な一本の杉で建てられた家も毀されて、近代設備の整ったホテルに建て替わる。それは時代の流れで致し方のないことだ。そう言えば、二十韻という新しい形式の連句をふっと思いついて、初めて作ったのは東京神田の「万代」という古

い旅館であった。ここは岐阜の国島十雨さんの御親戚のお宅で震災、戦災を耐えぬいた建物は、自らの風格があつて磨きこまれた廊下、天井などまっとうな用材をまっとうな職人が建てたものだといふことが一目で分かった。  
ニコライの鐘も師走の旅籠町 十雨  
冬の紅葉のまだ朱き庭 明雅  
ではじまる「師走の町」(八号所載)には、その時の感激がなお残っているが、これも今は取り毀されて、あとには現代的鉄筋造りのビルがそり立っている。  
不思議なことにある「万代」で「師走の町」を巻いたのが昭和五十九年十二月五日であったのに、「蘇山郷」に私が泊ったのが、昭和六十二年十二月四日であったのも、何か不思議な因縁があるような気がする。  
このまる三年間、私は二十韻とともに生きて来たようなものであった。私が「季刊連句」の編集人と発行人とを兼ねるようになってから、ことに二十韻の数が多くなった。それを早速見抜いて、「本号から先生が編集人発行人も兼ねられ、『二十韻』誌に本格的になったと思いました」とハガキを下された炯眼の方も居られる。もちろん、二十韻は未完成で、いろいろの利点とともに欠点もある。しかし、「花の冷え」(「連句辞典」所載)や「青時雨」(十一号所載)のような作品は、十分に歌仙と対抗できるものを持っていると思うが、いかがであろう。

## 現代恋句小論

東 明 雅

現代連句の恋句を語る上で、どうしても無視出来ないのは小出きよみさんの「恋句曼陀羅」(昭和五十七年刊)であろう。この本は、きよみさんがその全作品の中から、ことに気に入った恋句のみを抄出して纏められたものである。この本の序文を求められた時、私は次のように書いている。以下、やや長文であるがその一部を引用させて貰う。

「恋愛は人生の秘鑰なり」とは、明治の詩人北村透谷の至言である。これに倣って言うならば「恋句は俳諧の秘鑰(連句の文芸性の秘密を解く鍵)なり」と言ってよいだろう。事実、たとえば歌仙三十六句の中には二花三月と云って、花、月の句は特に賞美・珍重されるが、私の見るところでは、これは連歌時代からの遺物であり、連句で最も中心となり、賞美・珍重さるべきは、実は恋の句であると思う。そのことは芭蕉の恋句のすばらしさが、彼の俳諧に単にいろどりを与えているだけでなく、むしろ、恋句を通じて表現された「艶」と「しをり」とこそが、いわば彼の俳諧の文芸性の中心をなしていることに思いたせば、十分に納得されるところであろう。

その筆法を用いれば、きよみ連句の神髄はこの恋句の中に潜んでおり、きよみ連句を理解鑑賞する鍵も、この恋句の中にあると言ってよいだろう。そして、連句でなければ、短歌でも詩でも川柳でも表現できない恋の諸相と、「艶」と「しをり」とが、この書の読者に理解・共感されるならば、それはおのずから連句の愛好者、また実作者を増やすことにもなる。

私は、今もこの文章を否定しないし、私の連句に対する最も中心的な考え方の一つである。ただ、付け加えたいところがあるので、以下、具体的に述べてみたい。

まず、第一に和歌でも詩でも川柳でも表現出来ない恋の諸相というのは何を指すのか、それが曖昧であった。一口に言えばそれは恋句に俳諧性を持たせるといふことである。が、俳諧性とは、芭蕉の言うように、卑俗なるものの中に雅なるものを求め、「軽み」と「滑稽」の中に、真実の感動をもたらすものである。

もちろん、「恋句曼陀羅」の作品の中には、軽みと笑いをもったものもあったが、

王冠を賭けし世紀の恋もあり

魚魯

ミンクのコート露地を抜けゆく

芹川

胸元に袖を合はせる秋裕

きよみ

眉ぬれぬれと蛇身隠して

同

のような、この書の代表作と目される作品が主流で、「艶」と「しをり」とは確かに十二分であったが、軽みと滑稽は割合に乏しかったのではあるまいか。連句が座の文学であることから考えても、軽みと滑稽が恋の句にも、もすし必要な気がする。その点、

嘘のキスが本物となり

昌子

親が居て子が居て電話ままたらず

妙子

ばりばりと炒るちぎり鹿弱

千町

へっぱことおかちめんこと終の家

譲介

湯婆がはり抱かるるもよく

きよみ

など、近頃の「季刊連句」には漸く、「軽み」と「をかしみ」が出て来たように感ずる。芦丈翁は私どもに、「恋の二句目で笑わせる」と言われた。ともかく、恋句をもっとおもしろくすること、ことに、名残の表の恋は、すこし濃厚で、三句位続けるのが理想であるが、その三句目で、どっと一座の連衆が腹をかかえて笑うようなものが欲しい。現代ほど性的問題が解放的になったことはなかった。昔と言っても昭和二十年までは「男女七歳にして席を同じうせず」とか、「不義はお家の御法度」とかの儒教倫理が、

重く庶民の上のしかかっていた。だから、それを犯した昔の恋物語は皆「あはれ」で「しをり」があったのだ。今は性を人間解放の道として、讚美し謳歌している。若い人たちはみな恋を享受し不義も不倫も認めようとしぬ。そのような恋のどこに「あはれ」があり、「しをり」がある。社会一般がそうである。しかし、人間たる以上、恋の悩みを知らぬ者は現在でもない筈である。だから、その悩みの実態をつかみ、思いもよらぬ現代人の悩み、苦しみを現わすことはできよう。連句とは大体虚構の上に成り立つものである。もし、和歌や俳句ならば作者自身のこととして、社会的に指弾されるようなことも、連句ではその作者の才能を示すものとして賞められこそすれ、決して咎めだてられはしない。

雑沓まぎれ嫂の瞳よ

正江

過ぎし恋歪んでダリの絵のやうに

千町

前句、雑沓の中で嫂の瞳を意識した男、その時の情感は喜びか、悲しみか、おそれか、この作者は何も言っていない。それだけに読者の空想はひろがり、僅か十四五字で数千字の小説、あるいは数時間の演劇を想像させる力を持っている。表面的なキスとか、モーターとか言った語を安易に使った恋句とは全く違うものである。貞門の時代までは恋詞というものがあって、その語を使うことによって恋句が成立した。それを打ち破ったのが芭蕉である。現代の恋句もこの芭蕉の精神をもう一度振り返る必要があると思う。

先師の教え

芦丈先生が連句専門誌「山襖」を発売されたのは、昭和三十九年一月のことで、先生はこの時正に九十歳であった。そして、四十三年二月、九十四歳で逝去されるまで、ほぼ隔月に二十四号まで続いている。この中で先生はいろいろのことを教えられたが、恋句に関する記事も二、三あって、今となってはみな貴重な資料となった。

そのうち第七号に載せられた「恋句あれこれ」という一文を、特に御遺族根津美紗さんにお願ひして許を得、ここに転載できたのは、弟子として私の何より嬉しいところである。伊勢派の中で、どのような恋句が評価を得ていたかを知ることが、俳諧史の興味ある問題であるとともに、その教えは現在の連句における恋句の作り方・味わい方にも十分の示唆を与えるものである。

(明雅)

恋句あれこれ

(故)根津芦丈

一 神此世にあれましよりこの方で、恋は人生の花である。連句に於て恋句のない巻は一巻とは云えぬ。哥仙に於て二ヶ所、一折に一ヶ所づつで定座はない。前句次第で早い時もおくれる時もある。恋には成功の恋もあり失敗の恋もある。恋は男一人でも女一人でも成立たぬそれも句柄によって成立つ場合もある。いろいろあるから二、三あげて見る。

買はれ行けとはむごき一言

このような美人に何で産れしか

せっぱつまって、どうしてもそうするより外に道はない、

父か母が涙をふるっての一言である。自分は美人であるが、嬉しくて嬉しくてくらくらしていたが、こんなことになるのも美人であるがためであると悲しむ。無論遊女に売られるのである。

ちさき店出して榎田の出はづれに

二親の目もまいる墓なき

若者同志が、親のゆるさぬ恋の末、二人で手をとって家を出をした。旅先でさんざ苦勞をなめつくした末に、榎田(伊勢)の町はづれに小さいながら店を出して、漸く生活出来るようになって、よかったと二人で顔を見合せる。

膝なんど濡らして給ふと稚児を抱き

だがこんなに遠く故郷を離れては、二親の命日にもおまわりするお墓もないと、うち沈む。恋言葉はないが立派な恋句である。  
濡足袋で直に火達へ入りこみ  
教えて云はず掛のことはり  
忍んで来た男が、ぬれた足袋のまま火達へ這入りこむ折りも折り掛乞が来たのに対し、主人は折りあしく他出するすであると、教えて云わずと云う寸法。之も恋言葉のない恋句である。

むりむりと末の娘をもらひかけ

障子の外を走る袖の香

媒人が何回も何回も来て是非にと、云う処であるがいつもよい返事はきかれぬ。娘はどうしてもいやだと云うのに又来たのかうるさいと障子の外をにげる。このような恋句もある。

たった一度で浮名たてられ  
腰かけて居てもつまらぬ階段也

旅館の女中かなんであろう。酔って寝たお客さんへ気がきかして、コップを添えて水を持って行って、お客さんにやさしい言葉をかけての出来ごとであらう。浮名つまらないうと、朝の掃除を終わっても直に部屋へも行かず、階段に腰をかけている。変った恋である。こんな前句に対しては、余程要小心して附けぬと、川柳の領分へ飛び込んでしまう。  
遊び場である処の二の表的の句である。

政子の石のぬくき人肌

赤ん坊に尿で濡らされると、子供が出来るとの迷信は今もある。美しい恋句である。

長刀擡す門の入口

人と人重なり合てうち臥せり

盗まれ出づる命あやうき

いく昼夜も寝ずに戦い勝って、引揚げた武士たちが眠りかけて居る体と見ての附句である。この前句に対し誰も頭をしぼったが、なかなか附かぬ。やや程へてから橋良が附けてあつと云わせた有名な附である。

飲まず食わず戦った武士に、敵の大将の夫人か娘かが人質にとらえられ居るのを、大豪の忠臣がひそかに忍びこんで救い出だす。誠に命あやうしである。橋良は一夜四吟の内一人でもあり、天明のあの中にも連句に於ては、五佛仙中にも橋良に及ばぬ人もある程の名人である。

火中より千姫を救い出したる坂崎には恋の意味もあるが、この一連には恋の意はない。

(山襖第七号より転載)

付句における恋の倒錯

杉内 徒司

男が女の自の恋句をつくり、女が男の自の恋句をつくる  
—これを連句の付句における恋の倒錯と云う。  
例句を他人の作から選ぶのは失礼なので、徒子と名乗っていた頃の拙句を『朴の花』からひろってみる。

伊豆のどこかであひ引の約  
ぶらじあをとりにて一応身をよぢて

武翁 徒子

正妻持たぬことを家憲と  
等身の鏡に誇る雪の肌

「颯風」(昭和42・9)  
武翁 徒子

角巻とればあでやかな装  
君の脊に思ひのたけの爪を立て

「栗飯」(昭和42・10)  
武翁 徒子

問へば指さす喉の傷跡  
妻ありと知れど溺れて行く心

「銀杏」(昭和42・12)  
武翁 徒子

瘦せたいと今日も体操一心に  
若き亭主を持ちし気詰り

「城址の初夏」(昭和43・5)  
武翁 徒子

三千世界のカラスを殺し  
主と朝寝がしてみたい

は「自他伝」の伝で云えば女性の自の句だが、幕末の男の中の男、高杉晋作がものした都々逸であり、小説家が異性に感情移入をして物語を展開するのはごく普通ではないか。しかし、俳諧ではどうあるべきか、芭蕉はどうしたろうか—そこで芭蕉の付句を、自他の点から注意してみると、女性の自の句も次の例のようにあるので安心した事を思い出す。

あの月も恋ゆへにこそ悲しけれ  
露とも消ね胸のいたきに

翠桃 芭蕉

遊女四五人田舎わたらひ  
落書に恋しき君が名も有りて

「葎おふ」(元禄二年四月)  
曾良 芭蕉

冬至の縁に物おもひます  
けはへどもよそへども君かへりみず

「馬かりて」(元禄二年秋)  
土芳 芭蕉

ほそき筋より恋つのりつつ  
物おもふ身にも喉へとせつかれて

「種芋や」(元禄三年春)  
曲水 芭蕉

隣をかりて車引こむ  
うき人を枳殻垣よりくゞらせむ

「木のもとに」(元禄三年春)  
凡兆 芭蕉

「鷲の羽も」(元禄三年十月)

「春日遅々」(昭和43・7)  
男が女の自の句をつくることにすこしも疑問をもたなかった私が、問題を感じたのは次の一節を目にした時である。  
篠の屠家も住めば愛の栖  
肥桶の片棒かつぐも嬉しげに  
洞光 芦丈

この附句はじめは「嬉しくて」であったがそれでは女の自の句になる、男が女の自の句では蕉風の埒外のものだから一直他の句にした。(根津芦丈三回忌追善集『亭日記』『亭日記』は四十五年九月刊、『朴の花』は同年十月刊だから、この二書をよみくらべたのは四十五年秋の頃であり、この年は連句復興の年に当ると後年識者から指摘されているのを考えると感慨深いものがある。

この芦丈の指摘にやや動揺を覚えたのは四十一年六月十日から連句を始め約五十巻の実作の経験をした頃であり、そもそも、詩歌俳諧というものは上手に嘘をつくものであるとわきまえていた頃でもあった。

俳諧時雨忌が機縁となって生れた連句会に参加してきた鈴木三余は昭和女子大の先生だった関係から、野村牛耳指導のこの義仲寺連句会には昭和女子大の先生、理事、卒業生達が多数参加されるようになり、別に女性だけの「ローズ連句会」も出来る程発展していった。  
さて、その義仲寺連句会のある例会で次のような議論が出た。

「女性が出てくれば恋句になるなら、私たちにとっては、男性が出てくれば恋句になります、如何でしょう」

昭和女子大では昭和二十七年から連句研究に手をつけ、その記録は大学の近代文化研究所発行の「学苑」に収録されている程盛んだったから、我々の連句会に関係者が多数参加され、このような鋭い質問をされたのであろう。

私はその折、芭蕉の恋句の自他を思いおこし、芭蕉時代は俳諧に女性の参加がごく稀のため、芭蕉は女性の自の句をつくったのかも知れないとふと思った。

「付句の恋の倒錯」という点から蕪村、白雄の俳諧にふれるのも一興だが、それは他日の事としよう。

さて最後に倒錯が可か不可かと問われるならば、可も不可もなしと答える事にしているが、

「一句の主人公は常にへわれVでなければならぬ」  
に出合ってから、私は不可派に傾いている。  
(波郷)

# 恋句雑感

## 恋句について

小出 きよみ

批評眼というのは全言に近く、凡そ理論というものは無縁の衆生と云っていい私  
が、恋句について書かせていたゞくとすれば、これしかない。根津芦丈先生から直接  
お聞きした言葉、

「恋は二句目で笑はせる」

勿論これが恋句作法の全てではないけれど、実作して来て、時には、こんな付が一  
巻に大きな変化をもたらすことをしばしば  
経験した。背負投げの見事に成功した爽快  
感とか、くるり一転したしなやかな受身の  
どんでん返し、こんな感じである。で、我  
が花野連句会の作品から、芦丈翁に貰って  
貰えるかな、と思えそうな例句をすこし挙  
げてみたい。

14回 姫の小槌に成れる丈夫 絹子

な句であるところがいい。

京の梵妻鱧値切る月

よりそひて来しその宵のうすき膝

伴の部屋に貼りしマドンナ

浮世の裏側に片足を踏み込んだ中年男の感  
応に対し付句はやはり男の感応でありなが  
ら、青春まっ盛りの伴が、唯アイドルとし  
て壁に貼る健康なマドンナ。これは伴の生  
活を描くと同時に、父親の恋の哀愁を見事  
にかかびあがらせていると思う。

## 幻想の中の真実

市野沢 弘子

女狐の深き恨みを見返りて

寝がほにかゝる鬢のふくだみ

蕪村 几童

前句が「弭たしむのとの浦人」とあると  
ころから、狩人に雄狐を撃ち殺されたので  
ある。女狐の深い悲しみと恨みが、見返  
るまなざしの中に籠っているのが、ぞっと  
するほどに伝って来て、狩人もその罪の深  
さに一瞬たじろぐ思いであったことだろう。  
蕪村には狐を詠んだ句がいくつかあり、又、

金櫛のすり切れるまで添ひとげし 真木子

37回 雪が降るあなたの来ない別荘に 澄

恋患ひに効かぬ金丹 きよみ

44回 赤き襦袢の肩をすべらし 栄子

このころはあちらこちらに玉三郎 きよみ

57回 口笛の夜毎に田んぼ通ひ来て 久子

男怒鳴られこけつまるびつ まこと

65回 素足で川を渡りゆく女 栄子

駆落の人のカバンを持たされて 久奈

68回 ほのと想へり好もしき君 万津子

スポーツマン実は鬘の禿あたま まこと

82回 少年の僧の頭を抱きしめて まこと

不倫不倫とプリン啜らす きよみ

## あわれ・おかし

坂本 孝子

現代的な恋句とは、その舞台を吉原から

ホテルやディスコに移し、白粉をマニキュアに塗るかえたただけでは満足できない。今も昔も恋の情が深いほど人は無防備な姿を露呈し、それをどの様な眼で見、どの様な言葉で一句となすかで哀れにもユーモアにもなるであろう。現代に生きる作者自身はその姿を頭から嘲笑ったり感傷に溺れていてはペーソスのある余情は生まれて来ない。芭蕉の言葉借りれば「親しく言ひとどむべし」である。又一句の中で哀れ、おかしを詠むより、前句との出合いによる余情にそれが含まれている方が上等であろう。

苦い酒呑めばのむほど苦味増し

ほんの遊びと思ひながらも

テレクラの番号男女別

冬の館の悪しき建付

右の例は現代の恋の実態ではあるうが転じが弱く、余情の点でもうひと味出し切れていず残念だった。

胸の奥処に棲みつきし鬼

嬰を負ひて天ぶら揚げる澄まし顔

前句と出合ってこんなに凄いい恋句になってしまおうとは……。この余情を分析すれば哀れおかし、恐ろしその他。そして日常的

## ★新刊紹介★

☆小出きよみ著「あさって」

女流連句人の大先達としての小出きよみさんの随筆集、信大連句会、花野連句会のこととも載って、興味の尽きない本である。昭和六十二年九月出版。りんどう発行所刊。定価千円。

☆阿部正美著「芭蕉連句抄 第十篇」

この本には――軽みの時代(上)、という副題がついていて、元禄六年までの作品について、精密な考証をしている。昭和六十二年九月。明治書院出版。

☆清水瓢左著「蕉風連句の髓」

巻頭(序の章)には「翁出席の巻に顕れたる自他について」を掲載。破・急・緩の各章には「三日月日記和漢行註解」「冬の日管見」「猿蓑の脇三体について」等重要論文十編を収録。作品は白韻六巻、歌仙二十七巻、その他を収め、末尾に著者八八慶暢誹諧之連歌、及び全国より寄せられた賀章を掲載した。都心連句会発行。定価四八〇〇円。

「市中は」の巻 鑑賞 (VI) 東明雅

<sup>ナ</sup>5 戸障子もむしろがこひの売屋敷  
<sup>ナ</sup>6 てんじやうまもりいつか色づく

(秋。人情なし)

蕉

(現代語訳) 戸障子を唐でかこった売屋敷は買手のないまま秋になって、天井守り(蕃椒)の実が赤く色づいて来た。

(付心) 其場の付け。露伴は「天井守り」という語は「天井よりぶら下げて乾し貯うる故」にこの名があると言ひ、前句の戸障子に因んで、この語が出て来たのであるという。

(付味) 前句のわびしい荒れはてた余情を受けて、そのあたりの景色を以て応じている。この句は全くの叙景の句であるが、前句と詠みあわせると、主は去って家は荒れたままのわびしさであるが、蕃椒は時が来れば、真赤に美しく元氣よく色づくよといふ対照的なものの中に観想の意が自らこめられている。「句ひ」の付けと見てよい。

(転じ) 打越の騒々しい気分がすっかり静まって、あわれさが生まれた。

(補説) 去来の原句は「天上まほりいろ付にけり」とある。止めの「り」が、打越にさわるので改めたのであろう。

が、時間の経過が感ぜられ、句に深みが出て大変よくなっている。

天井守は蕃椒の一種で、ことごとく上を向く故にこの名がある。蕃椒は慶長年中、煙草と共に南蛮から将来されたもので、「をだまき」(元禄四年刊)には七月(初秋)の季語として出ている。

<sup>ナ</sup>6 てんじやうまもりいつか色づく

(秋。人情他)

来

(現代語訳) 月のさしこむ光りの中で、ひっそりと夜なべの草鞋を作っている男がいる。そのそばにはいつか天井まもりも色づいて来た。

(付心) 起情の句。前句の天井まもりにふさわしい田舎の小百姓などを思いおこし、はかないあわれさの余韻から月の光で草鞋を作るようなはない境遇を付けたもの。

(付味) 天井まもりと小百姓は位の付けであろうし、鄙びた秋の物あわれさが両句にただよっている。「うつり」とも「ひびき」ともとれよう。

(転じ) 打越は大家の廢屋、付句は小民の陋屋。さらに屋の景から夜にと景色は転じているが、物わびしさ、物あわれさは続いている。

(補説) 「月夜さし」という語は珍しいが、山田孝雄氏は万葉集の例について検討され、「月の明るき夜に月光の射すこと」をいうものであるとされた(「俳諧語談」)。月の光りの下で草鞋を作るのは、貧農・老人・仲間などのイメージである。秘註が「いつか」と「こそこそ」とはひびきであるという。それは「こそこそ」という俗語的な語感が、「にほひ」や「うつり」とは思われぬためであろうか。

また、この月光の下、草鞋を作っている人は平凡だが実直・勤勉でせい一ぱい生きている庶民を連想させ、「猿蓑」の中の凡兆の描く人間と人生には、これに似た庶民が多くあらわれる。これは凡兆という人の眼による新しい人間像の発見である。

<sup>ナ</sup>7 こそこそと草鞋を作る月夜さし

<sup>ナ</sup>8 蚤をふるひに起し初秋

兆

(現代語訳) 明るい月の射す庭でわらじをこっそりと作っている男、寝られぬままに起きて来て寝巻の蚤を振ふ女、いずれも初秋の夜の一景である。

(付心) 向付。裏の月の句が僧とさる引の向付であったのに、こゝでも向付として月を出したのは一寸問題がある。

(付味) 草鞋と蚤は位の付、それらを題材にして、軽い

一種のユーモアの気分がある。それは「句ひ」・「うつり」とも見られぬことはない。

(転じ) 打越と前句の間は沈んだわびしい気分であるのに対し、この二句は同じくわびしい気分はありながら、何か一種のユーモアと軽みがあり、変化している。

(補説) この付合の解釈については、いろいろ異説が多いが、我々はやはりまず「三冊子」の意見に耳を傾けるべきであろう。「『こそこそ』といふ詞に、夜の更けて淋しき様を見込み、人一寝するまで夜なべするものと思ひ取りて、妹など寝覚めして起きたる様に、別人を立て、見込む心を二句の間に顯すなり」(「三冊子」赤)と土芳は書いているが、これに対し、向付と見ず、「前句の人の俤」と見る説もある。即ち、「蚤を振いに起きて、あまりに月が明かるいので、そのまま寝に行かず草鞋を作っている」と解するのであるが、この場合は時間的に見て、付句が前句より先になるから後付と言わねばならぬ。

また、内外の関係から、「蚤をふるひに起し初秋」と読んで、草鞋を作る人が蚤を振うために立ち上ったさまと解する説もあるが、それでは诗情と、気分の転じの点で十分ではあるまいか。

この句、打越が天井まもりで初秋、前句は月で三秋だから、付句にはどの秋を付けてもよいのだけれど、初秋だとはやはり気分が打越に戻るの否定できない。はっきり季戻りとは言えないが、好ましくはないのである。

8 蚤をふるひに起し初秋  
9 そのままにころび落たる升落

蕉 来

(現代語訳) 初秋のころ、蚤のついた寝巻を振いに起き出たところ、しかけておいた升落しが単がかからぬまま、ひとりでにころび落ちた。

(付心) 其場。「類船集」に寝覚―荒れ単という付合語があり、前句の寝覚を単のあばれる為と見ての付合である。この句、原作では「そのままに打こけてある升落」であった。升落は単を捕える仕掛けであるが、それに単はかからず、そのままはずれて落ちていたさまとなり、前句の「蚤をふるひに」の「ひびき」に應ずることができない。それで「打ちこけてある」を「ころび落ちたる」にかえたのであるが、そうならば、けたたましい音を出して、ころび落ちたと見なければならぬ。

(付味) 「蚤をふるひに」の語勢に応じて、升落が転げ落ちたのだから「ひびき」の付けであり、蚤と升落は位の付けである。

(転じ) わびしい気分は打越にも通うけれども、この句にはおかしみがある。

(補説) 蚤にせせられて寝つかれぬ前句に、けたたましく転げ落ちて単の取れぬ升落は、ともに何か人をいらささせる趣に通うものがある。升落は升を反対にして、つかい棒で支え、餌を置いて、単が入るとつかい棒が外れて、単を伏せて捕える仕掛けである。

いような感じを受けるところから直されたものであろう。

10 ゆがみて蓋のあはぬ半櫃

11 草庵に暫く居ては打やぶり

蕉 来

(現代語訳) ゆがんだ蓋のあはぬ半櫃一つを所帯道具とした草庵暮らしも、暫くしてはまた打ちすてて旅に出るのである。

(付心) 起情。前句は、あっても用をなさぬものを象徴したような句で、これこそ、芭蕉が「夏炉冬扇」と観じたものと同じである。そして「打やぶり」というはげしい表現には、食物とか着物とかには執着しない風狂者の姿が感じられる。晝台(一七三二―一七九一)が「前句の貧弱より翁の身の上を思ひやり句をなし玉へり。蓋の合ぬの語より、打破りはひびきなり」と言っているのは至言である。

(付味) 右の晝台の説で十分であろう。「ひびき」の付けの見本のような句である。

(転じ) 大打越あたりから続いている貧しいわびしい気分が一転して、風狂者らしい趣が出て、丈高い句となった。これも三句の転じの見本のような句で、この句一つで、この巻がしまつて来たと言えよう。

(補説) この作品が出来たころ、芭蕉は例の幻住庵が棲家であった。やがてそこを立去るのであるが、全く自分のことを述べているような格好になっている。「俳諧古集之弁」(寛政四年刊)に「笑ひ笑ひひ出玉ひけん」と言っ

9 そのままにころび落たる升落  
10 ゆがみて蓋のあはぬ半櫃

蕉 来

(現代語訳) 単もとれずそのまままころび落ちた升落の傍には、ゆがんで蓋の合わなくなった半櫃が置いてある。

(付心) 其場の付け。升落を仕かけた納戸などの様子を描いたもの。さらに考えてみると、この一卷には裏十句目のさる引と十一句目の僧、名残の表三句目の刀持と四句目のさる引と、同七句目の草鞋をつくる男と八句目の蚤をふるう女というように対付の手法が多い。単もとれずころび落ちた升落と、ゆがんで蓋の合わなくなった半櫃とは、いづれも世に十分役に立たぬものという点で共通しており、その対付的発想によるものとも思われる。

(付味) 前句と付句との間に、中途半端で十分役に立たぬところが通いあい、また、その点で升落と半櫃とは位の付けでもあろう。また、その表現が「ころび落ちたる」・「ゆがみて……あはぬ」といういさか激しい気分が通いあうところから「ひびき」の付けと見てよいのではなからうか。

(転じ) 打越・前句・そしてこの付句と、事柄は変化しているけれども、わびしい、貧しい気分は変化していない。(補説) この句の上句は「ひびき」であったが、あとで「ゆがみて」にかえられた。「ひびき」も形がゆがみ、まがって、ねじれる有様であるが、やや言葉が強すぎ、重

ているのは、その時の芭蕉の心中を推量してのことであらう。

11 草庵に暫く居ては打やぶり

12 いのち嬉しき撰集の沙汰

蕉 来

(現代語訳) 草庵に暫くしてはまた打ちすてて漂泊を続けるうち、都では勅撰集が撰進されるといふ噂をきき、自分も歌人として生き甲斐があったとうれしく思う。

(付心) 其人の付け。また面影の付けである。これは諸書に言われている通り、西行法師の面影付である。「千載集」(文治三年)が撰進された時、当時、高野にいた西行は歌稿を選者の藤原俊成に送った。結局十八首入集したのであるが、これらの事実を前句から連想し、それを一歩進めて、歌稿を携えて草庵を出てゆく歌僧を着想した。「いのち嬉しき」は、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中」(新古今集、西行)からの連想であろう。当時の蕉門の西行に対する傾倒のほどが知られる。

(付味) 句ひ。前句そのものが西行・能因などの境地であったのを、この句で西行、しかも面影付でびたりと付けしたのは、面影付の見本のような出来ばえである。

(転じ) 打越のわびしい貧しい情景・気分から一転して

(補説) この付句がもと「和歌の奥儀を知らず」と付けたのをこのように直して、面影付の仕方を芭蕉が去来に教えたという有名な挿話が「去来抄」にある。



